

美術館講座「クリスマス・プレート」

11/25(土)・26日(日)に開催しました!

美術館の版画のアトリエの奥に陶芸窯があります。数年ぶりに窯を使うべく、カラフルな色と可愛らしいデザインで定評のあるatelier chieの岡田智恵さんに講師をお願いしました。美術館講座の創作枠で講師を招致するの久しぶりのこと。打合せからドキドキです。しかし、atelierの作品を見話し話を進めると直ぐに内容を定めることができました。開催時期も考慮しツリー型。岡田さんの作品でもよく使われている化粧土を使って、かき落としという技法で作成することに。

一日目には薄くスライスした陶板を丸棒で更にコロコロと表面を撫でて土を締めてから、ツリー型を切り出し、7色から好きな化粧土を表面に塗り終了。翌日、半乾きとなった表面の化粧土を彫刻刀や竹串でかき落とし白いラインを浮かき出させたり、押し付けて凹みを持たせたりしてオリジナルのツリーが出来上がりました。化粧土のかき落としという日頃扱わない創作技法に参加者も慎重に作業されていたので、試作用に全員で体験する一枚のツリーを用意して、一度彫刻刀をいれると、あら不思議、次々と自分のツリーにも柄入れができました。

講座終了後、乾燥させてから素焼き、本焼きを経て、クリスマス・プレートが出来上がりました。楽しいクリスマスを彩ってくれたのではないのでしょうか。(田代 亜矢子)



もっと近くで! インスタライブ

当館はじめての試みとして、Instagramのライブ配信機能を使ってレクチャーを行いました。コレクション展で展示中の作品やその作家について解説。カメラワークや音声など、テクニカル面で課題もありましたが、他館の取り組みなども参考にしながら、愛媛県美術館の所蔵品により親しみを感じてもらえるような解説や構成を心掛けました。視聴者の方々からのコメントやリアクションは担当者も励みになります。今後も続けていくかは検討中! です! (金成 めい)

*現在、公式Instagram(@themuseumofartehime)でアーカイブ配信をご覧いただけます。

左: 現代美術展(2023年)「伊予風情」より1936(昭和11)年
右: 左から 鈴木保平(山本忠司)部分1901(明治34)年、田中静海(松山正剛)部分1984(昭和59)年



コレクション展Ⅳ みる冒険 手触りと対話

2023年11月25日(土)~2024年1月8日(月・祝)

目で鑑賞するだけでなく、視覚以外の感覚や自分以外の視点を通して鑑賞することを試みる「みる冒険」。今回は、手の感覚と向き合い、手との対話を通して作品を味わっていただくことを来場者の方に体験していただきました。

作品の横に15種類の素材の薄片を収めた箱に手を入れて、作品の印象、心の動きとぴったりくる手触りの素材を選び、その素材の番号と、どこからそう思ったかを付箋に書き込み、作品の横のボードに貼り付けます。作品と触感を結びつけるという難題に多くの方が挑戦してくれました。

選ばれた素材は十人十色。同じ作品でも見る人により選ぶ素材は変わり、同じ素材を選んだとしてもその感じ方、捉え方はまた個々に違っていて、それぞれの視点で作品を味わうことができました。触感を通して「みること」を刺激された時間となったのではないのでしょうか。(石崎 三佳子)



折る刃式カッター

学芸員の
仕事道具

学芸員ならではの道具とは言えないかもしれませんが、私が四月に仕事を始めてから最も多用しているものといえば、カッターです。展示パネルや会場案内をつくるためにスチレンボードを切ったり、ワークショップの材料準備に用いたり欠かせない存在です。なかでも、切れ味の良い黒刃の折る刃式カッターが個人的に使いやすい、愛用しています。

メモ帳や鉛筆と一緒に、必要な時にすぐに使えるよう、常にポシェットに入れて持ち歩いています。(横尾 真特)



ご利用案内

- 開館時間 9:40~18:00(入室は17:30まで)
- 企画展及び貸展については、入室時間が異なることがあります。
- 休館日 月曜日
(祝日、振替休日及び第1月曜日に当たる場合は開館し、その翌日が休館日、年末年始は12/29~1/3が休館日)

編集後記

開館記念イベントの準備をするなかで、美術館に保管されている過去に発行された広報物や展覧会のポスターを見る機会があり、改めて美術館の歴史の長さを感じました。今号の2ページ目では、開館25周年に関連する記事を特集しております。ぜひお楽しみください! (宮本 成美)



愛媛県美術館—コースNo.67 2024
発行日—令和6年3月10日
編集・発行—愛媛県美術館
※掲載者の表記のないものはすべて愛媛県美術館



愛媛県美術館の
アート体験プログラムに
ついてはこちら
【TEL】089-934-1000

企画展

90th Anniversary Setonaikai National Park The Sea and I ART/LIFE
瀬戸内海国立公園指定90周年

わたしのうみ ART/LIFE

令和6年2月7日(水)~3月24日(日)
本館1階[企画展示室]

瀬戸内海は、今から90年前の1934(昭和9)年3月に日本最初の国立公園のひとつとして指定を受けました。本展では、この瀬戸内海がわたしたちの芸術や暮らしにもたらした影響について、絵画をはじめ、民藝や建築と幅広い分野の貴重な作品を日本各地の所蔵先よりお借りし、6つの区分でご紹介します。

まず、国内の国立公園を選定するにあたり、1932(昭和7)年に候補地を描いた「国立公園洋画展覧会」が開催されました。これをきっかけに時代を代表する洋画家により描かれた瀬戸内海の大作をプロローグとしてご覧いただけます。

第1章では、江戸から明治、大正にかけて描かれた瀬戸内海と旅にまつわる作品が並びます。桂宮家伝来である〈瀬戸内海航路図屏風〉(※)は、朱線で航路が示され、各地のランドマークも確認でき、旅気分が味わえる優品です。また、愛媛出身の中川八郎が設立に関わった太平洋画会を中心とした仲間も瀬戸内海を旅し、書籍や絵画に記録しました。中川の盟友、吉田博の作品のなかでも人気の高い木版画集「瀬戸内海集」の「帆船」シリーズ全6点も今回一堂に会します(※)。第2章では、松山出身の美術評論家、洲之内徹と親交のあった作家たちの個性に満ちた瀬戸内海にまつわる多彩な作品がみどころです。

そして、第3章では、海の「あお」の色をテーマに、砥部焼、伊予餅、倉敷ガラスそして倉敷織道を取り上げます。歴史や背景は異なるものの、いずれも作り手の強い思いにより現在までつながれ、私たちの暮らしを豊かにしている手仕事です。第4章は、日本の近代建築史を語る上で、欠かすことのできない建築家、香川の



五目舟(複製画「瀬戸内海集」)
1934年、吉田博の作品

山本忠司、岡山の浦辺鎮太郎、そして愛媛の松村正恒が、地域を思い1979(昭和54)年に提唱した瀬戸内海建築憲章を軸に、図面と写真等でその建築の魅力に迫ります。

エピソードでは、本展にあわせて、素画家・shunshunにより「いま/これから」の瀬戸内海が描かれました。音や映像とともにゆったりとした瀬戸内海の緑と光を感じてください。様々な切り口のなかで、どれかひとつでも、皆さんにとって「わたしのうみ」とは何か、思いみる機会となれば嬉しく思います。(喜安 碩)

*印の作品は2月7日から3月4日のみ展示となります。



瀬戸内海(複製画)江戸時代、田中静海の作品(複製画)

「ぶつやき」



「一夜飾りはいけん」と言われて毎年、私の車には12月30日からお正月を過ぎて15日くらいになるまで父親が飾りつけが置かれています。しかし今年、餅50を過ぎて初めて「松の内」という言葉を知りました。「松」もあるなら「竹」や「梅」もあるのかな?と、他の人が思いながら飾りつけてしまいましたが、本当に知らなかったので調べてみました。すると、この「松」は、門松や松の枝で作られた正月飾りのことを指すのだとか! さらに松の内とはお正月の事始め(12月中旬くらい)から神様が帰ってしまうまでの期間を指すのだとか! そして地域によって期間も違うのだとか! なるほど... まだまだ知らないことはたくさんあるゾ~と感じた2024年の元旦でした(鈴木 有紀)





愛媛県美術館は開館25周年を迎えました!

当館は1998年11月27日に開館しました。ここでは、開館25周年に関連して開催した事業を特集お届けします!



トピックス

「開館記念日イベントを開催しました!」

11月19日に開催された開館記念日イベントでは、開館25周年を祝い、盛りだくさんのプログラムを実施しました。

お馴染みの「コレクション展フロアレクチャー」や「コレクショントーク」、「大地は大きな黒板だ!」は、今年も多くの方にご参加いただきました。加えて今年度ならではのプログラムも多数実施。「オビ・ペインティング」では、美術館前庭の木に張られた大きな布が、来館者の皆さんによって、絵具で華やかに彩られました。また、エントランスには美術館がこれまでに発行してきた広報誌や過去の企画展のポスターを展示すると共に、杉浦非水のフォトスポットも登場しました(フォトスポットは現在も設置中です)!そして今回は、愛媛交響楽団によるミュージアムコンサートを4年ぶりに開催。秋にぴったりの曲の数々が美術館講堂に響きました。

皆さま、一緒にお祝いしていただきありがとうございました!(岩本 成美)



レポート

コレクション展Ⅲ 開館25周年記念 THE BEST COLLECTION25

令和5年9月30日(土)~11月19日(日)

平成10年(1998)11月27日に開館した愛媛県美術館は、このほど25周年の節目を迎えました。これを記念して、コレクション展で「25周年」にちなんで、誇るべき名品25点を選び、展示しました。「海外作品」「日本画・書」「日本の洋画」「日本の現代美術」の各ジャンルから選抜した名品に加え、郷土作家の中で特に重要な作家と位置づけている杉浦非水、畦地梅太郎、真鍋博の3人の作品をご紹介いただきました。(長井 健)



レポート

コレクション展Ⅳ 開館25周年記念展

Inter-Action 県美コレクションが生んだ出会いと交流

令和5年11月25日(土)~令和6年1月8日(月祝)

愛媛県美術館では、前身である県立美術館時代から現在に至るまで美術作品を収集してきました。本展では、新たに収蔵される作品と既存のコレクションがむすびついていくことによって生まれる相互作用「Inter-Action」を楽しんでいただけるよう、展示空間を作り上げていきました。さらに会場では、「興行」「抽象」「視点」といった、作品を鑑賞する糸口を紹介しながら作品を展示しました。本展を通じて展示担当者も、所蔵作品の新たな面白さ・楽しみ方に気づくことができました。(宇野 茉莉花)



コラム

カンフォロのあゆみ Canforo

県美の開館当初から発行されている美術館ニュース「カンフォロ」ですが、実は長い歴史の中で徐々に形を変えています。発行当初はA5サイズで12ページほどの冊子でした。ちなみに、この形態のカンフォロは毎月、美術館中庭の櫛(イタリア語でカンフォロの意)を様々な角度から撮影した写真が表紙を飾っていました。その後、形やレイアウトを変えながら発行され続け現在に至ります。毎月職員が分担して記事を執筆し、美術館の様子を様々な角度からお伝えしている「カンフォロ」。今後も楽しみに!(岩本 成美)



企画展

コンドウマキのおしごと展

作家生活 20周年記念

~「リラクマ」「うさぎのモフィ」から「ゆめざんこう」まで~

令和6年1月20日(土)~3月24日(日)

本館2階[常設展示室1・2]

愛媛県松山市出身のコンドウマキは、1997年に文具会社のデザイン室に入社、「みかんぼうや」や「リラクマ」などのキャラクター原案、商品デザインを担当しました。2003年に退社して後は、現在までフリーで活動しています。誰もがよく知る人気者である「リラクマ」をはじめ、世界30か国以上の国や地域でアニメーションが放送・配信されている「うさぎのモフィ」、さらに「おふとんさん」「ニャーおっさん」「おはぎちゃん」など、彼女が生み出した数多くのキャラクターは、世代を超えて、そして日本はもとより世界各国でもたくさんの人々に愛され続けています。キャラクターデザインのほか、絵本作家

としても活躍し、その“のんびりかわいい”作品世界には、心に染み入る優しく温かなメッセージが込められています。

コンドウマキ作家生活20周年を記念する本展は、デビュー作『木からおりたミカン』(みかんぼうや)から、最新作となる絵本『ゆめざんこう』まで、貴重な原画を中心に、その作品を幅広く、網羅的に紹介する、初めての回顧展です。親しみあるそれぞれのキャラクターの魅力とともに、日常のなげない、愛しい時間を届ける数々の作品をどうぞお楽しみください。(長井 健)



「リラクマ ここにいます」
(主婦と生活社 2015年)
© 2024 San-X Co., Ltd. All Rights Reserved.



「うさぎのモフィ もりのまいにち」
(主婦と生活社 2021年)
© aki kondo/CP



「ゆめざんこう」(白泉社、2023年) © aki kondo



大阪中之島美術館で5月6日(月)まで「モネ 遺作の情景」展が開かれています。国内外のモネの代表作が一堂に会する本展には、当館からも「アンティープ伊」(1888年)を出展しております。機会がございましたら、どうぞご覧ください。(武田 信孝)